

トピックス…②

酪農教育ファーム 全国実践研究会議

本会議は8月8日、東京都新宿区立東戸山小学校において、全国各地で情熱を持って酪農教育ファーム活動を実践しているファシリテーターや教育関係者などを対象に、全国実践研究会議を開催した。

本会議は、昨年8月に設立された日本酪農教育ファーム研究会が主催する23年度研究集会と同時開催されたもので、酪農関係者の協力を得ながら実践研究活動を展開している全国の教育関係者20名が参加した。酪農関係者としては、ファシリテーターや酪農関係団体職員など40名が参加した。

会議開催にあたり門谷廣茂本会議専務は、「昨年夏は猛暑の影響で乳牛の受胎率が落ちたために本年の分娩時期が後ずれし、春からの分娩頭数が減少している。加えて、大地震や原発事故により生産基盤が脆弱化している。これにより生乳需給がひっ迫しているが、消費者のみなさんに安心して牛乳を飲んでもらえるように、酪農関係者一丸となり生乳生産の回復に努力している。このたび家畜伝染病予防法が改正され、農場での飼養衛生管理基準が定められる。昨年は、口蹄疫の発生があったことから、酪農教育ファーム活動のあり方を再検討する必要もある」と、主催者挨拶した。

続いて、来賓出席した倉見昇一文部科学省学校教育官は、「小学校から高等学校まで、本年度から順次改定される新学習指導要領では、学んだ知識を活用する能力を高めることを目指しており、酪農教育ファーム活動など体験学習が引き続き重視されている」と述べた。

基調報告では、鈴木由美子広島大学大学院教授が「酪農教育ファームにおける“いのちの学び”～生命尊重の価値観により、自他相互思考の育み～」と題して、昨年度に適応指導教室の児童・生徒を対象に行った研究の成果について、石田牧場（神奈川県）で実施した酪農体験の映像と併せて紹介した。

本研究は、牧場での酪農家や乳牛とのふれあい体験学習活動が、子どもたちの“いのち感”に及ぼす教育的効果、とくに自分に対する肯定的感情（自尊感情）、自分の能力への肯定的感情（自己効力感）、

他者に寄り添う感情（共感）、他者に喜ばれようとする感情（向社会的）の育成に及ぼす効果を明らかにすることを目的としている。

牧場でのふれあい体験学習活動を経験した児童・生徒を対象とするアンケート調査結果の考察によって、酪農家や乳牛とのふれあいは自尊感情と自己効力感を育成するのに効果的であることが明らかとなった。

そのあと参加者は3班に分かれて、「口蹄疫が酪農教育ファーム活動に与えた影響と今後の対策」をテーマにグループディスカッションした。グループディスカッションでは、「口蹄疫について知ること、知りたいこと」、「口蹄疫後に変わったこと、変わらないこととその理由」、「食といのちの学びに効果的につなげるための酪農体験プログラム」について意見が交わされた。

